

姦^やられる

館 淳一

1

その夜、渋谷恭介はまたも女を襲った。

十人目の犠牲者である。彼女は恭介の住む東京西部の学園都市に最近ふえた女子学生専用マンションの住人だった。こともあろうに恭介は、そのマンションの彼女の部屋で凌辱したのだ。それも無理に忍びこんだのではなく、男子禁制をうたっているマンションの正面玄関から、被害者のあとを追って堂々と入っていった。

なぜ、そんなことができたのか？ それは恭介が女装趣味の持ち主であったからだ。

ボブ・カットのカツラをつけ、いかにも女子大生っぽいグレイのスーツ、白いフリルのついたブラウスを着、黒いシーム入りのストッキング、黒皮のパンプスをはいたスタイルで玄関の自動ドアを押すとき、さすがに恭介の胸は、肌色のスリップ、パットをしたブラジャーの下で早鐘をうった。しかし管理入室

の男は受付の窓からチラリと眺めただけで、なにも気づいたようすを見せなかった。

紺のサンローランのイニシャル入りのスカーフで喉もとを隠し、よく見ると女子学生にしては目もとなど濃すぎる化粧ではあったが、小柄な背丈といい体つきといい、どこから見てもまさか男が女装しているとは思えない外見である。それに、いま家庭教師のアルバイトを終えて帰ってきた女子学生のすぐ背後からついてきたので、てっきり彼女の友人かと思ったのにちがいない。

強姦とは、決してゆきあたりばったりになされるものではない。統計的にも、はじめて会った見知らぬ者同士が加害者、被害者になる強姦事件は少ない。渋谷恭介の場合も、獲物をしとめるまでには念入りな下調べをしていて、この女子学生なども住んでいる部屋、通っている学校、だいたいの帰宅時間などはすでに知っているのだ。週に二回、国電でひと駅離れた街に家庭教師のアルバイトに行き、その晩は十一時すぎに帰ってくる。そのころはマンションの中は静まりかえっていて、恭介のもくろみには好都合であった。

先にエレベーターに乗った女子学生は、自分の部屋のある五階のボタンを押した。恭介は押さないで自分も同じ階で降りる、という意味表示を試みせた。肩がくつつきあうほどのエレベーターのなかにいても、女子学生は恭介の女装になんら不審の念を抱いていないらしい。早くもバッグを開けて自室の鍵を取り出している。

五階に到着する寸前、恭介はさげていたショッピング・バッグのなかから登山用ナイフを抜き出した。エレベーターの扉が開くと、女子学生はカーディガンの背を見せて、さっさと廊下を歩いていく。彼女の部屋は廊下のつきあたり

だ。少し間を置いて恭介は、こっそり彼女の背後に迫る。

「静かにしろ！」

ひと気のないのを見すまし、恭介は行動に移った。押し殺した声とともに、ドアを開けた瞬間の女子大生を背後から羽がいじめにして、いっしょに部屋のなかへとびこむ。

「あつ、なにを……！」

叫ぼうとする若い女の顔さきに、切れ味の鋭い登山用ナイフの、冷たい刃先が突き出された。叫びが喉もとで押し殺され、頬が血の気を失い、瞳が精いっぱいに見開かれる。

「騒いでみる。これでおまえの顔をザックリだぞ」

美貌に自信のある女ほど、「殺すぞ」という言葉より効果がある。歯をガチガチ鳴らしながら、女が声を出した。

「やめて、傷つけないで……。言うとおりにするから……」

恭介はすばやく玄関のドアを閉めてしっかりと内鍵をかけてしまう。ドアの傍には非常警報のボタンがあるのだが、それに触れられないように警戒しつつ、無言で若い女を寝室のほうへ追いやる。

鉄筋コンクリートでほかの部屋と遮られたマンションは、少しばかりの声や物音は外へ聞こえない。恭介が主としてマンション住まいの独身女性を狙うのは、一度侵入してしまえば、襲った側のほうに好都合な構造だからだ。

ベッドの上に突き倒されても、まだその若い女子学生は、侵入者が男性であることに半信半疑だった。

ナイフで威嚇しつつ服をむしり取り、キャミソール一枚の姿にしてベッドの

上に仰向きに寝かせる。

「いったい、どうしようか……」

脅える生贄の手首足首に細縄を巻きつけ、手早くベッドの四隅の柱に縛りつける。クラシッくなタイプのベッドだから都合がいい。女体はたちまち大の字に固定された。

そうしておいてから、恭介はおもむろに着ているものを脱ぎだした。ジャケットとスカートを脱ぎおろし、スリッパもすばやく足もとにすべりおろす。ベージュ色のブラと。パンティ、それにウエストを引き締めるウエストニッパープールのガーターベルトに包まれた裸体が現われた。

そこまで裸になっても、ひとつのことがなければ、女子学生はまだ恭介が女装者であることに気がつかなかっただろう。

恭介の体はすんなりとして体毛も少なく、肌の色は白い。筋肉質ではない。

小柄な体は、女性の下着を身につけて、カツラをつけ、化粧をしていればまるで女性だ。

ベッドの傍に置かれた三面鏡のなかに、恭介の下着姿が写った。己が姿を見て、恭介はさらに興奮した。

形よくパットでカップを盛り上げたブラジャー、ウエストニッパード引き締めて砂時計のようにくびれた腰の線、そして自慢のすらりとした脚腺を包む黒い長靴下。まるで外国のポルノ映画に出てくるような洋装下着を身につけると、彼は異常なまでに欲情が昂ぶる。

「さあ、可愛がってやるぜ」

スカートを手にして、恭介はベッドに縛りつけられた犠牲者に近寄った。

女子学生は、侵入者のはいたセミ・ビキニのパンティの布地が、前方に猛々しく突き出しているのを見て悲鳴をあげた。その唇にスカーフが押しこまれた。がっちりと猿ぐつわを噛ませてから、恭介はさげてきたシヨッピング・バッグのなかから用意してきたものを取り出す。

ロープ、カミソリ、バイブレーター、そしてポラロイド・カメラ……。

2

二時間後、渋谷恭介はふたたび女の衣裳をまとって女子大生の部屋をあとにした。

羞恥と屈辱と苦痛で、なかば気を失ったような犠牲者は、全裸のまま乱れたベッドの上で動く気配もない。

誰からも怪しまれずに女子学生専用マンションを出ると、すばやく闇のなかにまぎれるように遠ざかる。

犯行現場から歩いて二十分、恭介のアパートに帰りつくまでなにこともなかった。

（ま、あれだけのことをされりゃ、警察に届けようなんて気はおきないだろうが……）

恭介はたかをくくっていた。

アパートはダイニング・キッチンと寝室、それにバスルームがついているだけで、南側に高層マンションが立ちはだかっているから陽あたりが悪い。しかし各戸の出入口が別々で、真夜中に徘徊はいかいする癖のある恭介は、他人に見とがめ

られずに出入りできる便利さを買っていた。

部屋に入ると、しっかり鍵をかける。

ようやく自分の城に帰ってきた女装愛好者は、ふうと吐息をついた。

まず女ものの衣服を脱ぎ捨てて、浴室でシャワーを浴び、体にまとわりついた若い女の汗と体液の匂いを洗い流す。

三十分後、恭介は自分のベッドに横たわっていた。

いちばん気に入りの、「ロングウエーブのカツラをつけ、薄化粧をし、フランス製香水「ブワゾン」をふりかけた体には淡いブルーの透きとおるようなネグリジェをまとっている。ブラジャーはしていないが、やはりブルーの、フリルがついたパンティをつけている。自分の城のなかで、歪んだサド性向の若い独身男は、いつものように女の下着を身につけて孤独のときを楽しむのだ。

いま、ぬくぬくと安全な場所に帰りついた女装の強姦魔は、先刻の凌辱劇の体験を反芻しているのだ。

シヨッピング・バッグのなかから、女子大生の部屋から持ち帰ってきた戦利品を出してベッドの上にひろげる。

犠牲者の若いぴちぴちとした肌を包んでいたブラジャー、パンティ、キャミソールなどの下着だ。

可憐なバラの刺繍がアクセントになっている白い木綿のパンティを広げると、ムツとする女の匂いがたちのぼった。その匂いに鼻孔を刺激され、恭介の男性器官はブルーのナイロンの下でむくむくと怒張しだした。彼が手にした布地は、女子大生の吐いた新鮮な蜜液をたっぷり吸っているのだ。

指と言葉でいやらしく騷なぶりながらしだいに肌着を剥ぎ取っていき、女装の侵

略者は最後に生贄をパンティ一枚の裸にした。それからたくみに両の手を使って布地の上から彼女の敏感な性感ゾーンを刺激し、若い体の奥から透明な花液をしとどにあふれさせたのだ。

羞恥と屈辱のなかで、うら若い娘は猿ぐつわのなかに快樂の呻きを吐き出し、白い裸身をびくびくと痙攣させて最初のアクメに達した。そうやって凌辱の前を下着に芳香ある淫液をたっぷり吸わせ、それを持ち帰るのを恭介はつねとしている。

犠牲者たちの体臭はひとりひとり違う。恭介は戦利品の下着類をビニールの袋に入れて保存し、折あらば取り出して残り香を嗅ぎ、めくるめくような凌辱劇の記憶を再生させては狂ったように自慰に耽^{ふけ}るのが習慣なのだ。

いま、まだ濡れている可憐な下着からたちのぼるなまなましい女体の性の匂いを嗅ぎながら、恭介の欲望はふたたび活力をとりもどし、ふだんは陰毛のなかに潜み隠れているほどの男根が勢いよく膨張してナイロンの布を突き破らなければならぬ。

たまたらずに指をネグリジェの下に這わせ、すべすべとした弾力のある薄布越しに、熱く脈打つものを愛撫しながら、恭介はさらに戦利品をひろげる。

凌辱のさなかに写したポラロイド写真だ。鮮烈なフラッシュを浴びて、全裸にされた女体が若鮎のようだ。

最初一枚は、凌辱する前に写し出した秘所むきだしの開脚姿勢。縛りあげられ、ナイフで脅かされて死ぬほど恥ずかしい体位を要求された若い娘のそむけた顔に涙が光っている。

処女ではなかったが、指で柔媚な花卉を押し展^{ひら}くと、その奥にまだ処女膜の

痕跡が確認できた。男と交わった経験はまだ数度というところだろう。花卉の色素の沈着も浅く、柔褌の内側は目にも鮮やかなコーラル・ピンクだった。繊毛は薄くまばらで可憐なたたずまいを見せている。

二枚目は、最初の凌辱の直後だ。

仰向けに縛りつけられた女体は、己が身に加えられた荒々しい侵略の衝撃で呆けたように弛緩している。深ぶかと貫いた奥に激射された白濁した牡の吐液が、花芯からあふれて太腿のつけ根を濡らしている。

三枚目は浴室だ。

女装の拷問者が見ている前で屈辱的な排泄を強いられた犠牲者は、全裸をシャワーで洗われたのち、タイルの上でひざまずく姿勢にされて肛門を犯された。やはり背後から写したポラロイド写真は、灼けた肉の杭を引き抜いた直後の、無残に裂けた粘膜のめくれあがったさまをとらえている。やはり汚辱の樹液が肉奥から太腿の後ろへしたたり落ちているのが肛門凌辱の明らかな証拠だ。

そして四枚目。

女子大生は全裸でタイルの上に仰向けにされている。両の手首は頭の上で蛇口にくくりつけられている。両足首もそれぞれロープで縛られ、シャワーフックに吊らされて、股も裂けよとばかりの開脚ポーズだ。そして二度も犯された可憐な秘花をとりまく織草の繁みはきれいに剃りとられている。泣きながら哀願するのをかまわずに、恭介が鋭利なカミソリを使って一本残らず剃りとってしまったのだ。

そうしてから極大のコケシ型バイブレーターを秘裂に押しこんでさんざんにもてあそび、何度も女体を痙攣させ、失神寸前にしてからバイブレーターを粘

膜に加えさせたままの淫猥きわまりない写真だ。

最後の五枚目。

この写真には恭介の姿も写っている。ふたたび後ろ手に縛りあげ、寝室に追いたてて写したものだ。

両の尻袋がまっ赤に腫れあがるまでスパニングで責めさいなみ、まだブラジャーにウエストニッパー、ストッキングをつけたままの女装拷問者は、自分の昂ぶりきったものを若い娘の唇にあてがい、オーラルセックスを楽しんだ。最後の一瞬、恭介は犠牲者の愛らしい顔に煮えたぎる獣欲の溶液を噴射したのだ。真横からセルフタイマーで写した写真は、そのいまわしい凌辱の一瞬を的確にとらえている。

(ああ、たまらない……)

このうえなく残虐で淫らな女体責めのポラロイド写真で己が行為をふたたび味わい直した恭介は、激しく欲情していた。ネグリジェをまとった独身男はベッドを降りたち、洋服ダンスを開いた。

女物の衣裳が入れてあるタンスの戸の裏には、全身が写せる大きな鏡がとりつけられている。

恭介はネグリジェの裾をまくりあげて姿見の前に立った。

鏡のなかに、すんなりとした下肢を腰まで剥き出しにした寝衣姿も淫らな美女の全身像が、熱っぽい目で見かえしている。

白く、まるで年ごろの女の子のような肉感的魅惑さえたたたえた脚である。きれいに体毛を剃りあげているから、すべすべしていて、腿をすり合わせる感触さえ快い刺激だ。

淡いブルーのセミ・ビキニ型パンティの下で、爆発を求めている熱い肉器が布地を裂くばかりに猛っていて、それだけがエロチックな女体偽装を裏切っていた。

恭介は、ぴっちり腰を包んでいた弾力性のあるナイロンの薄布をひきおろした。

バネ仕掛けのように、それははねて前方に突き出した。灼けた欲情を噴射させる肉の砲身だ。保護衣は完全に後退して、すでに透明な分泌液を吐いている先端の粘膜は露呈している。

恭介は鏡のなかで腰をくねらせる女体をめがけるようにして砲身を握って突き出し、したたかにしごいた。

まさに自分で自分を犯すような倒錯の一人二役だ。犯す男も、犯される女も喘ぎ、熱い息を吐いた。

「うっうっ！」

恭介の下腹部が耐えがたい快美にうち震え、あともどりできぬ線を越えた肉砲は灼熱の激情を噴射された。

鏡のなかの女体に樹液が散った。

「あああ……」

快樂の余情に身を震わせながら、恭介はベッドの上に崩れるように倒れこんだ。

「姉さん……」

彼の喉から、一語が洩れた。

渋谷恭介を女装趣味にひきこむ潜在的なきっかけとなったのは、彼の姉、知子の下着であった。

恭介は東北のある小都市で生まれた。

幼いときから病弱だった彼は、体格も小柄で華奢で、おとなしい内向的な性格に育った。

姉の知子は三歳年上で、恭介とは正反対にのびのびと育ち、性格も陽気で外向的、いつも周囲の人気者だった。陰気な雰囲気を漂わせ、友人もほとんどできない弟は、そんな姉のハツラツとした姿をいつも眩しく眺めていた。

弟が中学一年、姉が高校一年のときに、恭介は倒錯的な形ではじめての射精を体験した。

ある初夏の日のことだ。恭介が学校から帰ると、すれちがいに姉がとび出していった。友人とプールへ行くのだという。ショートパンツ姿に着換えて自転車にとびのったときの太腿のつややかさが、早熟な少年の網膜に鮮烈に灼きついていた。

自分の部屋に入っても、なぜか恭介は胸苦しいような思いにとらわれ、宿題も読書も身に入らなかった。

やがて思いきって姉の部屋に忍びこんだ。すれちがったときに姉が発散した処女の酸っぱいような体臭にひかれたせいだろう。

むっとするような年ごろの少女の匂いがこもる知子の部屋で、恭介はベッドの上に脱ぎ散らかされた姉の制服と下着を見つけた。大あわてで着換えたのだ

ろつ。汚れたパンティまでそのまま放り投げられていた。

恭介の小柄な体の奥から熱い欲情が湧きおこったのはそのときだ。

汚れたパンティと、汗の匂いのこもったスリップを手にして恭介は自分の部屋に戻った。さいわいに両親も外出していて家には彼ひとりだ。

胸はドキドキと早鐘をうち、白い布片を持った手はブルブル震え、喉はカラカラだった。恭介は素ッ裸になり、姉のパンティをとりあげ、性器のあたる部分をひろげて鼻を押しあてた。尿の匂いと発育ざかりの処女特有の濃厚な酸っぱい分泌物の匂いが少年を陶然とさせた。彼は幼いながらも激しく勃起している。

やがて恭介は姉のパンティを素肌にはいてみた。それは快い感触で彼の腰を包みこんだ。そつと彼は自分の裸身を鏡に写してみた。

鏡のなかにいたのは、男とも女ともつかぬ細やかな体をした生き物だった。

その腰を包む白い布片の中央部がはちきれんばかりに盛り上がっている。

恭介は腰をうちゆすった。無意識の行為だ。柔らかな肌着との摩擦が敏感な肉に堪えがたい快美な刺激を与え、ひと声呻いて少年は身を震わせて射精した。

知子は高校を卒業すると東京の女子大に通学した。それまでの三年近く、恭介は機会あるごとに姉の下着を盗んでは、それを自分の精液で汚した。汚しつづ、知子の健康美あふれる肉体を犯す妄想に耽ったものだ。

少年時代のこの倒錯的な自慰習慣が、恭介の性的志向を女装趣味へ押しやっただ最大の原因だろう。

しかし、原因はもうひとつあった。

恭介が女性にもてなかつたことである。

成長し、東京の大学に進学するようになった彼は、異性から注目されるようなタイプにはなりえなかつた。

女のようなよなよした感じさえ与える小柄な体つき。とりわけ醜いわけではないが、どこかといって特徴のない目鼻だち。そしてひっこみ思案で内向的で臆病な性格。

頭脳だつてめだつて優秀というわけでもなく、結局は二流の大学の文学部に、かろうじてすべりこむことができた程度である。

妄想に耽り、非社交的なタイプの恭介に、あまたいる女子学生の誰もがふりかえりもしなかつた。女子学生ばかりではない。喫茶店のウェイトレスさえ、恭介が店に入ってきてても気がつかないのだ。彼は女たちにとって“見えない男”であつたのだ。

性欲は人一倍強いほうである。なのに健全な形で処理する機会がないまま、大学の四年間を彼は童貞ですごした。毎夜オナニーに耽りながら、それでも女を買うだけの勇氣もなかつたのだ。

卒業してのちは、名もない二流の商事会社に入社した。営業的な能力があるわけもなく、実直さだけを買われて経理、庶務といった職務をやらされているが、誰も目にとめて引き立ててくれるわけではない。もちろん会社のOLたちにとつても、彼は大学時代と同じ“澄明人間”であつた。

社会人になってはじめて彼は女を知った。勇氣を出してソーブランドに行ったのだ。

射出欲は満足させられたものの、事務的にとりあつかわれ、心のこもつたサー

ピスを受けなかったことが彼の心を傷つけた。おまけに彼の性器は、ふだんは陰毛のなかに隠れてしまうほど小さく、包皮にくるまれている。

「可愛いおちんちんだこと」

と口に出したソープ嬢の言葉のウラに軽蔑を感じとった恭介は、それだけでもうソープに通う意欲を失った。

そうして二十六になったいま、恭介は結婚するあてもない独身をつづけながら、女たちに対する敵意だけをつのらせていくようになったのだ。

そんな彼の性的ゆきづまりにひとつの突破口をつくる転機が訪れたのは、ほんの数カ月前のことである。

偶然、ある週刊誌の片隅に出ていた女装愛好者のための専門店の公告が目にとまったのだ。

姉と別々に暮らすようになってからは、女性の下着とも縁がなく、かといって盗みをはたらくほどの勇氣もなく、せいぜいあられもない下着姿のポルノ写真が満載された雑誌を眺めて下着に対する渴望を慰めてきた恭介にとっては、その公告はまたとない福音だった。

ある日、勇を鼓してその店のドアを押し込んだ恭介は、色彩の洪水を思わせる下着の満艦飾を見て狂喜した。その日、パンティ、スリップ、ガーターベルトにストッキングを購入した彼は、アパートで悩ましい憧れの下着類を身につけて狂ったように自慰をくりかえしたものだ。

それ以来、恭介は女装のとりことなった。ある意味でいえば、女性が相手になつてくれないのなら、自分がその女性になつてしまおうという倒錯した心理

がはたらいているのだろう。妄想のなかでは男の恭介が女に変身したもうひとりの恭介を犯しているのである。

やがて恭介の部屋にはタンズひとつほどの女物衣裳がそろった。最初は服だけ着て満足していたのが、いまではカツラをつけ、化粧を施し、アクセサリーまで揃えるという凝りようだ。

化粧は女装専門店の指導を受け、あとはひとりで研究して完全なものにした。もともとハッキリした特徴のないということが、女に変身するさい有利になった。化粧品でアクセントをつけることによって、驚くほど美しく装えることを知ったとき、さらに恭介は女装の妖しい世界にはまりこんだ。

女装者は大別して二つのタイプに分けられる。

男たちに女として愛されたい、という同性愛のタイプと、女装という変身によって性的興奮をたかめるが、欲望の対象はあくまでも女性というタイプだ。

恭介は明らかに後者であった。

だから、彼はゲイバーや女装者同士の集まりに興味はなかった。彼は女装を、いままで遠ざけられていた女の世界への侵入手段として用いるようになったのだ。

幸か不幸か、なで肩で華奢な体つき、白い肌、普通の女性とさして違わない背丈、少ない体毛やヒゲ、という肉体的素質が彼の女装を、女たちでさえも見破れないほどの完全なものにした。

夜になって、こっそりと家のまわりを女装して歩きまわることから始め、やがて恭介の行動はしだいに大胆になった。

初めてデパートの女性下着売場に行き、女店員から怪しまれもせずセクシー

なパンティを買うことに成功したときなどは、昂奮のあまり、ドレスの下で激しく射精したほどである。

味をしめた恭介は、しだいしだいに行動半径をひろげた。ときには女子大の構内をうろつき、トイレに入って学生たちのおしゃべりを聴きながら自慰をしたこともある。大胆にも水着姿になってプールの女性用更衣室を徘徊したこともある。そうやって、女たちの体臭をしみこませた下着類を手に入れることも成功した。

そういった盗みが強姦に発展するまで、さほど時間はかからなかった。周囲に男がいないと思っているとき、女はまったく無防備な心理になる。それがわかったからだ。

女装に凝りだして以来、恭介はいままでになかった探求心と冒険心を身につけるようになっていた。念入りな下調べのあと、ロードショー劇場の女性トイレで待ちかまえ、上映中に駆けこんできた若い娘を犯したのが手はじめだった。ナイフで脅かされ、恭介の見ている前で素ツ裸になった娘を水洗の鉄パイプに縛りつけ、思うさまに犯したとき、恭介は心のなかに語ったのだ。「これまで俺を無視してきた女たちを、徹底的に犯してやるぞ」と。

4

女装の強姦常習犯、渋谷恭介が十一番目の犠牲者を選んだのは、次の休日のことだった。

休日における彼の日課は新しい犠牲者さがしと、決行するために必要な調査

や下見に費やされる。その日も、近くにできた大病院の看護婦室の周辺を、新しい獲物を探しまわってきたのだが、残念なことに恭介の食指を動かすような獲物を見付けだすことができず、むなしく帰らざるをえなかった。

（不思議なものだ。強姦をやりはじめたころは相手のえり好みなどをしなかったものだが、最近は、好みのタイプでないとする気がしない。なぜだろう？）

アパートに帰る道すがら、恭介はそんなことを考えていた。彼がひと目見て欲情をもよおすような女とは、背が高く、しっかりとした体格で、乳房もヒップも大きく、それでいてすんなりとした脚をもち、健康的な色気を発散させているスポーツ・ウーマン的なタイプの女性だ。

（つきつめれば、知子姉さんみみたいなタイプとということだ。オレは無意識のうちに、姉さんを強姦したいという願望を実行しているのかも……）

そんなことを考えながらアパートの近所まで戻ってきた恭介は、ふと向こうから歩いてくる男女のカップルを見て、顔色を変えた。

（姉さん……？）

腕を組んで歩いてくるカップルの、女性のほうがふと視線を恭介のほうへ走らせたからだ。その顔つきといい体つきといい、恭介の最初の性欲対象であった、実の姉の知子にそっくりだった。

もちろん、いまは結婚して九州に住んでいる実姉が、いまここにいるわけがない。

（それにしても似ている……）

髪を軽快にショートカットにし、白いニットのサマースーツに包んだ大柄な体をしなやかに動かして歩く。ちょっとつつむいたときの目の表情もふくめて、

容貌もურიふたつと言っていていくらい似ている。われ知らず恭介の胸はときめいた。

(この女を犯りたい……)

だが連れの男は何者だろうか。恭介は二人のほうに歩み寄り、気どられぬように注意しながら、さぐるような視線をチラチラと走らせた。

(弟だ。この二人よく似ている……)

鼻すじが通って、涼やかな目。姉が二十四、五とすれば弟はまだ十七、八といったところか。恭介は自分が姉の美貌を譲り受けなかったから、その弟に対して無意識のうちに反発と嫉妬を覚えていた。

(だが、姉弟のくせに腕など組んで……。どういうつもりだ?)

それも、男が女をエスコートするという感じではない。女のほうが男を導いている。姉がさしのべた腕の肘のところに弟がつかまっているのだ。

その理由はかなり近づいてようやくわかった。少年の濡れた大きな目は、焦点が定まらず、虚空のかなたを眺めているようだ。

それが少年の美貌に一種謎めいた雰囲気を与えているが、少年が視力を失っていることは火を見るより明らかだ。そう思ってみると、足どりもぎこちない。

(目が見えないのか。あのようすではつい最近失明したようだ……)

強姦魔が見ているとも知らず、姉と弟の二人連れは恭介の前を歩きすぎた。恭介の鼻を、健康に成熟した女体の匂いがくすぐった。むっちりと突き出た胸、歩くたびにゆれて男心をそそるヒップも量感をたっぷりとたたえている。

その瞬間、恭介は決意した。

(よし、この女が新しい獲物だ)

恭介は美貌の姉弟のあとを追った。どうやら二人は散歩の途中らしい。とすれば、この近くに住んでいるのだろう。

恭介のカンは的中した。驚いたことに、二人は彼のアパートを見おろすようにそびえている高層マンションに入ってしまったからだ。

エレベーターに乗った姉弟は、最上階十一階にある部屋に入った。一一〇一号室。おそらくこのマンションのなかでも最高価格になる広い部屋だ。

(こいつら、金持ちの子供か……?)

こっそりとあとをつけた恭介は、二人が部屋に入るのを見とどけた。

(獲物にとって不足はない。しかし、よりもよって隣のマンションの住民とは……)

だが、襲うときは女装だ。素顔を見破られるおそれはない。とすれば、たとえ隣の住民であってもかまわないわけだ。

(問題は弟の存在だが、なに、目が見えないのではろくな抵抗もできまい。それに、縛りあげた弟の前で、姉を犯すというのもおもしろい趣向かも……)

女装強姦魔の頬が歪んで、不気味な笑みが洩れた。

最初はスリルがあって刺激的だった行為も、数を重ねるにつれて刺激が薄れていくのだ。その結果、人はより多くの刺激を求めて倒錯的な行為に溺れていく。いまの恭介がまさにそうだった。ただ犯し、もてあそぶのではものたりず、今度は肉親の前で犯される屈辱を女に味わせようというのだ。

(いや、弟に姉を犯させるのもいいぜ)

倒錯の度を増していく歪んだ欲望の炎が、恭介の肉の奥で燃えあがった。彼は激しく勃起した。

一階のポストで住人の名前を確かめる。表札には麻吹絵里子、雪夫と書かれていた。

（いい名前だ。獲物にふさわしい名前だ。待っているよ麻吹絵里子に雪夫。おれがお前たちに、一生忘れられない、ものすごいことを教えてやるからな）

5

都心にある大手商事会社で秘書として働いている麻吹絵里子が、女装趣味の暴行魔、渋谷恭介に襲われたのは、それから一週間後のことだ。

絵里子は午後七時にはかならず帰ってくる。マンションに残した目の不自由な弟、雪夫の面倒を見るため、彼女はいま自分のデートやコンサートなどに行く楽しみをすべて投げうっている。それというのも、彼がたったひとり残された肉親だからだ。

雪夫が視力を失ったのは、今年の春である。

目標としていたK大学に首尾よく入学を果たし、高級官僚であった父と母はいたく喜んだものだ。

その入学祝いをかねて、麻吹家は雪夫に車を買って与えた。

入学発表直後、すぐ運転免許をとった雪夫は、嬉々としてそのスポーツタイプの車をのりまわした。

悲劇は、大学に入って一カ月後に起きた。

ゴールデンウィークの休みを利用して、雪夫は父と母を乗せて、軽井沢へドライブ旅行に出かけた。

早朝の高速道路で、反対車線を走っていた長距離の貨物トラックが、いきなりセンターラインをのりこえ、雪夫の運転していた車に激突したのだ。原因は運転手の居眠り運転である。

はねとばされた車は一回転して道路わきに転落した。運転席の雪夫はからも打撲傷だけですんだ。彼はかろうじて潰れた車から脱出できたが、後部座席にいた両親は車のなかに閉じこめられた形になった。しばらくしてガソリンが引火、爆発した。

雪夫はその事故の直後から視力を失った。専門医は精密検査の結果、視神経や眼球その他に異常はないと言う。

「精神的なショックが原因です。自分の運転していた車で両親が無残な死を遂げた、その悲惨な現実を信じまい、見まいとしたとき、潜在意識は本人の視力を奪ってしまうのです」

その様な例は希有ではないという。強姦されたショックで目が見えなくなった娘もいるのだ。問題は、果たして雪夫が視力をとりもどせるかどうか、だ。医者は言った。

「難しいですな。治った例もあるし、一生そのまま盲目で終わった例もある。なにかのひょううしで視力をとりもどす、ということを経験して生きるよりほかに手段はありません」

絵里子は、大学もやめて家に引きこもってしまった雪夫がふびんでならない。

(早くよくなって、また笑顔をとりもどしてほしい……)

それだけが絵里子のせつなる願いであった。しかし、事故後三カ月たったいまも、視力回復のきざしは見えない。

そのやさき、強姦魔のえじきに目されてしまったとは、この姉弟にとってなんと残酷な運命であった。

恭介のやり方は、女子大生を襲ったときと同じであった。いっしょのエレベーターに乗りこみ、絵里子がドアを開ける瞬間を狙って襲ったのだ。

絵里子は、ナチュラルウェーブの黒髪をたらし、黒い半袖のニットドレスをまとった美女が自分をつけ狙う暴行魔とは夢にも思っていなかったから、ナイフをつきつけられると、やすやすと侵入を許してしまった。

「いいか、騒いでみる。殺すぞ。おまえも弟もだ」

その言葉と冷たい登山ナイフの刃で絵里子を屈伏させると、ドアを閉め、玄関ホールで絵里子の手首を後ろにまわして手錠をかける。相手が二人だから、縄で縛るよりも時間がかからない手錠を大人のオモチャ屋で購入しておいたのだ。

「お願い。弟には手を出さないで……。あの子は目が見えないんです」
哀願する絵里子を、女装の青年はつきとばして居間に追いたてる。

視力を失った美少年は、居間でステレオに耳を傾けていた。そのとき、玄関のところで姉と誰かが言い争うような声と物音だ。

（強盗？）

雪夫は手さぐりで電話機のテーブルまで歩みよった。受話器を持ち上げ、指先で数字を確かめながら一〇番をプッシュしようとする。絵里子とともに恭介が入ってきたのはその瞬間だ。物も言わずに侵入者は美少年を殴り倒した。絵里子が悲鳴をあげる。恭介はナイフをふるって電話のコードをスッパリと切断した。

雪夫をひったて、すばやく手錠をかけ、姉と弟を絵里子の寝室につきとばすようにして追いこんだ。

(もつ、こつちのものだ。ここならどんなに泣いてもつがわめこつがだいじょうぶ。じっくり時間をかけて料理できる)

アイシャドウも色鮮やかに、美女の粧いをこらした女装の恭介は、満足げな笑い浮かべ、恐怖に凍りついたような姉と弟を見やった。

6

絵里子は聡明な娘であった。それに、女装した強姦魔が次々と女性を襲っているという噂も耳にしていた。その男の狙いがなんであるかは、目の前の女装青年の目が宿した狂的な光を見ればわかる。

彼女は観念した。どう見ても逃れるすべはない。

(私の身がどうなっても、雪夫の生命だけは……)

絵里子は雪夫に声をかけた。

「雪夫さん。この人の狙いは私です。私たちに勝ち目はありません。抵抗すればナイフで殺されるでしょう。ですから、あなたはじっとがまんしていてください。私ひとりが犠牲になればいいんですから……」

「ほほう、ものわがりのいいお嬢さんだ。しかし、世の中そんなに甘くないぜ」
抵抗する気力をすでに失っている美少年を立たせると、恭介はナイフをふるって着ているものを引き裂いた。

「あッ、なにをするんだ……」

「やかましい！」

ズボンはおるか、ブリーフまでズタズタに裂かれて布片に化し、床に落ちた。陰毛のなかにちぢこまっているような男性器官まで剥き出しの全裸だ。視力を失った少年は、それでも姉の前で裸にされた屈辱に、白い頬を紅潮させた。

ウインザーの椅子が寢室の中央に持ちこまれ、裸の少年はその椅子に後ろ手にくくりつけられた。両足首は思いきり広げられて、椅子の後ろのほうの脚に縛りつけられた。下腹部を思いきり露呈させる卑猥な開脚縛りだ。ほっそりしたムダ肉のない、恭介に負けず肌の白い少年は屈辱と羞恥に涙を流した。

そうやって完全に雪夫の自由を奪うと、美女を装った青年は姉のほうに向きなおった。ナイフの刃がピタピタと血の気を失せた頬を叩く。

「さあ、お嬢さん、服を脱いでもらおうか」

手錠をはずされた絵里子は、盲目とはいえ実の弟の前で、みずからの着ているものを脱ぎ捨てる、という屈辱を味わった。しかも倒錯的な侵入者は命令した。

「弟は目が見えないんだから、いちいち、おまえがなにをしているか、弟の耳に自分で説明してやるんだ」

服従するよりなかった。ためらっていると鋭いナイフの刃が、自分ではなく雪夫の喉にあてがわれた。恭介は的確に絵里子の弱点を見ぬいている。弟に対する盲愛をとことん利用する気なのだ。

やがて、姉の唇から細い声が洩れた。

「雪夫さん……。私、いま上衣を脱ぎます」

通勤用のサマースーツを脱ぐ手が小刻みに震えていた。

縛りつけられた雪夫の、ほんのメートルも離れていない場所が、愛する姉の屈辱的なストリップの舞台だった。しかも、目の見えない弟に、口で説明するという二重の羞恥が課せられたシヨウである。

ジッパーがシュツと鳴った。さわさわという衣擦れ。ふわりと匂う甘やかな女の体臭。

「スカートを脱ぎました。こんどはブラジャーです」

雪夫の全身が熱病のように震えた。

「ね、姉さん！ やめてくれよ……」

ホックがはずされた。

「……ブラジャーをとったわ。次はパンストよ」

わかい女の甘酸っぱい体臭が、いつそう濃く室内にたちこめる。いまや絵里子は薄いビキニのパンティー一枚だ。彼女のお気に入り、淡いピンクのナイロン製で、布地を透かしてくるぐるとした恥叢の三角州^{デルタ}が、ふっくらとした恥丘に覆っているさまをそっくり覗かせている。

「次はパンティ……」

「姉さん……」

ひそやかな布片のすべる音。

「雪夫さん。私、いま……裸です」

弟はその声とともに激しく勃起した。

「ほほう。目は見えないが、瞼の裏にはちゃんと姉貴の裸が写っているらしい。えらく昂奮しているぜ」

そう言いながら、恭介は自分も激しく昂奮し、穿いているビキニの前面を透

明な分泌液でしとどに濡らしているのだ。

「これで終わりじゃないぜ」

羞恥のあまり、ぼつとなつてつづくまった一糸まとわぬ女体を引きたて、ベッドに追いやる。

「さあ、その上でオナニーをして見せるんだ。解説つきのな」

「そ、そんな……」

泣き声を出すと、頬にしたたかな一撃がとんだ。

「やれ！ 弟の物をちょん切られたいか」

7

パシッ、パシッと柔肉を撲つむごい音が室内に反響した。鋭く哀切な絵里子の悲鳴がオーバーラップする。女装の恭介が姉の首根っこをおさえ、ベッドの上に這わせて丸裸の尻を撲っているのだ。

白い臀丘がまっ赤に腫れあがるまでスパンキングを受けると、絵里子はたまらずに尿を洩らし、シーツをしとどに濡らした。

「やめて、お願い……。あなたの言つとおりになります」

泣き濡れた頬をもたげて屈伏の言葉を吐くと、それで思いきったかのように、美しい娘は一糸まとわぬ裸身を弟に向けて、ベッドの上に仰向けに身を横たえた。下肢は大きく割り広げられ、濃く艶やかな秘毛に飾られた女の芳園があからさまに露呈される。

盲めしいた美少年は、姉のかすれた声を聞いた。

「雪夫さん。姉さんは今、あなたの前のベッドに脚を広げて寝そべっています。これからオナニーをするけど、淫らな女だと軽蔑しないで……」

すすり泣くように語尾がとぎれる。

やがて、震えるような声が、弟の前で展開されるシーンを解説した。

「お姉さんはいま……おっぱいを揉んでいるの。オナニーをするときは、いつも胸をさわるのよ。ほら、乳首がとんがって……」

「右手を下のほうへ……。いま割れ目を広げてます。人さし指と薬指で……中指で私のクリちゃんを……」

雪夫は姉の声が欲情に喘ぐのを聞いた。

屈辱的なオナニー実演の行為で、必然的に若い女体は快美感を味わいはじめたのだ。

「姉さん……」

少年はその声を呑んだ。彼の脳裏に、全裸で我が身を指姦する姉の痴態が写し出された。

さらに激しい欲情が、椅子に縛られた若い男性の肉を灼いた。恐ろしいまでに肉の砲身が仰角をもって空にもちあがる。血管が破れるのではないかと思うほどズキズキと脈打つ怒張だ。

(地獄だ。これは悪夢のなかの地獄だ。夢なら醒めてくれ……)

雪夫は胸のなかで叫んだ。昂ぶる姉の声が、さらに欲情を煽り立てる。

「姉さんの指、いまなかに入っていく……二本、三本……。ああ、たまらないわ」

ヒップをつちゆすつているのだらう。ベッドのスプリングがギシギシと軋む。

悦楽のすすり泣き。女体はいまや撤退不可能な地点まで来ている。全身に脂汗を噴いているのだろう。新鮮な汗と女体の吐く蜜の匂いがたちこめる。肌が燃える熱ささえ雪夫に伝わってくる。

「雪夫さん、許して……。姉さん、もうやめられない。笑わないでね……

ひときわ激しくベッドが軋んだ。

ヒッ、という喉の奥から絞り出す声。

白い若鮎のような裸身がはじけるように弓なりにのけぞる。自愛の果ての孤独なオルガスムスが爆発したのだ。

「ああ……」

びくびくと、白い大理石を思わせる健康そうな太腿が震えつづけ、大らかな肉体がやがてぐったりとなった。快楽の喘ぎが、みじめなすすり泣きに変わる……。

だが、むごい心理的拷問はまだつづく。恭介は絵里子の脱いだパンティで蜜にまみれた秘園を拭いた。記念の戦利品に彼女の匂いをたっぷり沁みこませるためだ。それから、素ッ裸でうちひしがれた美しい姉娘を引き立て、弟の縛られた椅子の前に連れてくる。

「ここに四つん這いになれ」

その位置は弟が両脚を広げ、まだ女体を知らない男の欲望器官をたかだかともたげているまん前だ。

「さあ、顔を突き出して、おまえの可愛い口で弟の張りきったものを慰めてやるんだ」

サッと絵里子の頬から血の気が失せた。

「そんな、そんなことできません！ あなたの言うとおり、恥ずかしいことをして見せたじゃありませんか。もう許して！ 早く私を犯して、おしまいにして！」

バシッ、と絵里子の尻が鳴った。つづげさまに鳴った。抗議の声がとぎれ、苦痛を告げる悲鳴が尾を引いた。

「言うことを聞け。聞かないと……」

狂った女装者の手にガスライターが握られていた。ジュポツと音をたてて点火する。青白い火が燃える。恭介はライターを雪夫の股間に持っていく。

「ひいっ！」

雪夫の魂消るような悲鳴。ライターの火が一瞬、怒張しきった肉柱をあぶつたのだ。

ジュジュウツ。

陰毛が焦げて、いやな匂いをまきちらした。

「やめて！」

「じゃ、弟を啜えろ！」

「ああ、地獄だわ。あなたは悪魔よ！」

また陰毛が焦げる音。雪夫の喉を裂く呻き。

「……やります。やりますから、やめて！」

姉は叫んだ。叫んでから手をさしのべ、ぶるぶると震え、恐怖で萎えた弟の器官を握った。

「雪夫さん……」

「姉さん……」

二人のあいだに、姉弟だけに了解できる電流のようなものが流れた。絵里子は長いまつげをそっと閉じ、柔らかい肉の根を唇に受けた。

8

「ああ……」

雪夫の裸身が、椅子に坐ったまま震えている。激しい快感が全身を駆けめぐりだしたからだ。

弟の身体に顔を埋めた絵里子は、いまやすっかり勢いをとりもどした脈打つ器官を根もとまですっぽりとふくんでいる。舌と歯と粘膜が性愛の無音なる音楽を奏で、それはいま熱狂の度を増していく。

二度、三度、フラッシュの青白い光が裸身を鮮烈に灼いた。恭介がポラロイドに姉弟の痴態を記録しているのだ。しかし、姉も弟もともに肉の悦楽に没頭して、気にもかけてない。絵里子のたおやかな指が、下肢を、股間を、ときには肛門のほうまで優しく激しく愛撫し、雪夫の昂奮を煽りたてている。

「うっ、たまらない……」

あまりにも刺激的な姉弟の愛欲行為だ。女装の侵略者は、着ているものをかなぐり捨てた。

黒のニットドレスの下は、黒いブラとパンティ、そして黒いガーターベルトで、やはり黒い長靴下を吊っている。恭介がいちばん好む西洋の娼婦スタイルだ。黒い透け透けのパンティの下では、いまや最大点まで膨張しきった肉の兇銃が薄布を突き破ろうとしている。

女装者はそのセクシーな下着をひきむしった。小さくはあるが、硬く、充分に頭部を露呈させた肉の銃身が、獲物を求めてはね出す。

侵略者は弟の前にひざまずいて背徳の口戯を加えている姉の背後に近づいた。

自分も膝をつき、むっちりと張ったヒップを両手で押さえこみ、膝頭で犠牲者の下肢を割り広げる。仄紅いアヌスの菊形までそっくり開かせるポーズだ。

秘裂は己が淫戯に昂まり、しとどに蜜を吐いて濡れていた。処女ではない。

しかし性交経験の浅さを証明する、愛らしいピンクの花園だ。清艶というべきたたずまいだ。

片手で灼ける銃身を握り、黒い下着姿の女装強姦魔は腰をねじこんだ。女体が貫かれる感覚に、豊かな脂肪がはじけ、うねった。

（犯された）

気配で雪夫は凌辱が姉の身体に加えられたことを知った。

（汚されるんだ。この汚い獣に……）

下半身からの強烈な感覚に、ひととき、姉の加える淫らな口唇の刺激が弱まった。爆発点に達するまでに、雪夫の身体に余裕ができた。

「うっ、いい体だ。こいつは、とびきりうまい肉だ……」

雪夫と向かい合う形で絵里子を犯している恭介が、快美の呻きを吐き出し、性愛の悦楽に急速にのめりこんでいく。

そのときだ。犯されながら、まだ雪夫を口に啜えながら、絵里子の手が弟の背後に伸びていったのは。

はた目には、背後からの圧力に負けて弟の体にしがみつくようにも、昂奮のあまり抱きつき、背を愛撫するかのようにも見えた。しかし、絵里子の細い指

は正確に動く。

(僕を縛っている縄をほごこうとしている！)

雪夫は姉の意図を察知した。

狂気の暴行魔が加える倒錯的な責めから逃れるには、彼が快楽をむさぼるのに熱中している瞬間しかない。姉は自分が犯されている間を利用して、弟の体を自由にしようとしているのだ。

(それなら、姉さんの動きをカモフラージュしなきゃ……)

雪夫は姉の意図を凌辱者に察知させまいとして、快楽の呻きをわざとはりあげ、裸身をおおげさにゆさぶった。

「ああ、姉さん。すごくいい。たまらないよ……」

恭介は、絵里子が弟の体に唇の淫戯を加えつつつけているものとばかり思いこんだ。冷酷無比な兇獣の、致命的な誤りだった。

いまや絵里子は、弟の体を椅子にくくりつけている縄目を解いている。痺れきった手首にふたたび血流が通つ。

(ありがとう、姉さん……)

自由をとりもどした手首をそっと動かし、姉の手を握ると、勇気づけるように握りかえす。

「うっ、最高だ……。最高の獣物だ……」

絵里子の背後では、そんなこととは知らない恭介が、しだいに高まる肉の快楽に酔い痴れ、ガーターベルトを締めた細腰を淫らにうちゆすり、抽送をつづけていく。臨界点に達するのはまもなくだ。

注意深く雪夫は解けた縄をさぐり、その長さを計算する。絵里子も雪夫も、

秀れた頭脳の持ち主だ。言葉は交われなくとも、いつなにをやるかは、どちらも理解している。

「ああ、たまらん……」

凌辱者が吠えた。ぶるぶると腰が震え、睾丸が緊縮した。爆発の一瞬前だ。最後のひと突きだ。

「いまよー」

弟の器官を離し、姉が叫んだ。弟はとけた縄を持って立ち上がり、恭介の首のほうへ、絶頂の呻きをたよりにとびかかった。

「おおっ！」

いまや煮えたぎった溶岩流を噴出させようという瞬間、首に縄を巻きつけられて恭介は狼狽した。しかも射精時の雄は反射神経が麻痺している。全身が快美の極で無防備なのだ。

「ぐえっ！」

満身の力をこめて雪夫が縄を締めつける。

「死ね、けだもの！」

気管を締めつけられながら、女装の凌辱者は激しく噴射した。どろどろと煮えたぎる白濁を女のなかに放射し果てた。快美の果てに意識が冥くなる。

「ぐ、ぐぶ……」

肺に空気を求め、恭介の女のような裸身が痙攣した。しっかりと巻きついた縄が、喉首を完全に塞いだ。

いまだびくびくとうちふるえる肉体が、樹液の最後の一滴を絵里子の体の奥に注いだとき、恭介の息が絶えた。

全力をふりしぼって力尽きた雪夫が縄を放すと、生命を喪った女装者の体は、貝のような微妙にふるえる優しい肉とのつながりが解け、どうとばかりに床に倒れた。同時に雪夫も崩折れた。緊張が解け、姉の裸身ともつれあうように床にくたくたと臥せた。

瞬間的に憎悪と殺意を爆発させたためか、雪夫は姉の柔らかい腕と胸に抱かれ、つかのま、気を失ったのだろう。

「雪夫さん、雪夫さん……」

姉の呼ぶ声が遠くからだんだん近くなる。雪夫は目を開けた。暗黒のなかに赤い炎が渦巻いている。その渦がだいに速くなり、拡散していく。赤い炎が白熱していき、最後に絶えがたいほど眩しく……。

雪夫は意識をとりもどした。

目の前に姉の顔があった。泣き濡れた顔があった。泣き濡れた頬があった。

白く丸い円球の上に、ぼちちりとバラ色の乳首をのせた乳房があった。

「あ……」

雪夫の瞳はいつぱいに拡大した。これは幻覚ではない。

「雪夫さん、あの男は死んだわ。もう安心よ」

丸裸の絵里子は、羞恥も忘れて弟をかき抱いていた。雪夫の目から大粒の涙があふれ出た。

「どうしたの……」

訊ねた絵里子の顔がパツと輝いた。

「雪夫さん、目が、目が見えるのね！」

翌朝、麻吹姉弟の住むマンションの近くの公園で、ひとりの女性の死体が発見された。警察が駆けつけて調べてみると、それは女ではなかった。若くて小柄な男性が、女装して死んでいたのである。縄で首を締められて殺されたものだ。

男の身元は、近所のアパートに住む独身の会社員、渋谷恭介と知れた。彼の部屋を調べた警察は、そこに過去十件の強姦事件の証拠を見つけて愕然とした。非道な連続暴行魔こそ、虫も殺さぬような顔をしたおとなしい恭介の仕業だったのだから。

しかし、誰がなぜ、恭介を殺したのか、その後の捜査にもかかわらず、ついに解明されぬまま事件は迷宮入りした。

しかし、死体が発見された日、現場をみおろす高層マンションの一〇一号室では、終日カーテンが閉ざされたままであったのを訝しく思うものはいなかった。

(終わり)